

試験騒ぎ

名探偵本間砂六——と斯う云った計りでは讀者諸君に分るまいが、抑も本間砂六と云へば、英國では三歳の童兒すら知つて居る程の有名な素人探偵で、「警察でも恐るゝ手腕家、」これは迎も警察の手に負へぬ、本職の探偵では駄目だといふ様な大事件は、きつと本間の所へ持ち込まれる。而も驚いた事には、どんなに複雑な犯罪でも一度彼の手に掛れば、快刀乱麻、立所に解決を告げて、

未だ嘗て例外が無いといふことである。彼の探偵法が面白い、普通の探偵なれば犯人の後を附廻し、足を棒の様に走り廻るのが常であるが、本間のは違ふ、手足の探偵ではない、頭脳の探偵だ。走り廻る兵卒ではない、一室に閉ぢ籠つて判断力で事件を解決する帷幕の將だ。

彼の探偵は常に斯う云ふ■順序になされる。先づ、依頼者から事件の成行きを詳細に聞取る、緊張した注意力を以て事実を悉く頭脳に入れて了ふ。それから寝台の上に端座する、前には山の様に刻烟草を積み重ね、大きなパイプに、詰めては吸ひ、詰めては吸ひ、紫色の煙が天井の模様を隠す迄吸ひ詰める。瞑目沈思、外面眠れるが如く端座し乍ら、彼の頭脳は時計のセコンドの様に、一歩一歩事件の筋路を辿つて行く。彼の鼻から吹き出される濛々たる紫煙は、彼の頭脳を車輪の如く活動せしむる蒸汽の煙と等しい。前の烟草の山は時と共に低くなる。香よき煙が室内を閉ぢこめて雲と棚引く頃、彼の前に一芥の烟草も影を止めずなる頃、彼の頭脳には事件の真相が眼に見る如く浮ぶのである。此の時、心地よき朝日の影がカーテンを眞紅の色に染めなす。夜を徹しての瞑想は、彼に翌日活動の方針を授ける。精力絶倫なる彼はこの方針に随つて、其の日の中に事件の解決をつけて了ふ。これが彼の常である。

英國に於ける本間の評判は非常なも

のだ。芝居に迄本間形といふのが出来て、役者も本間の眞似をすれば名聲が上がるといふ訳。殊に彼の探偵談を記した書物の如きは、出版すれば直ぐに羽が生えて飛んで行く。

その本間と、斯く云ふ僕とが——本間と僕は親友である——「勿論二人は友達であるが」ある事件で、某大学の附近に數日を過したことがある。この物語はその滞在中に起つた出来事で、極めて些細な事件だが、本間の探偵的手
「僕 をしてゐるのだ」

腕を示すには持つて来いの「挿話御話であると思ふ。

「本文に入る前」前に一寸と御断りして「おくが」「置きたいのは」、その事件といふのが「が」は、実は今云つた某大学に關係してゐるので、最高学府の權威を尊重する意味に於て、地名人名は一切假りの名を用ゐる「といふことである」ことにする。

ある夕方、僕等の宿へ一人の來客があった。取次の下女は、兼ねて知合のセントリユーク学院助教相馬春人氏の來訪を告げた。相馬氏は丈高く躰瘦せて、感じ易く激し易き性質の人である。氏の態度には常にゆつたりした所は見られぬ。が、今日は殊に甚しい、ひどく興奮した様は、一見して何か異常の一大事が起つた事を示して居る。氏は室に入るや否や惶しい口を開いた。

「本間さん、是非暫く貴方の貴重な時間を割いて戴きたいのですが、実は大学

に一大事が起りました……貴方が当地に滞在して居られたのは実に僥倖です。若し貴方の様な方が御出でにならなかったらば、私は殆んど途方に暮れた所です。」

本間は冷淡である。

『私は今非常に忙しい、今頭を乱されては困る。警察の助を御借りなさつては如何です。』

『イエー、左様なことが出来るものですか。一度警察沙汰にすれば、もう取返しがつきません。この事件は大学の名誉にも拘はることでですから、是非犯罪とならぬ様、内内で解決がしたいと思ふのです。斯様な事件は貴方の方に御願する人はありません。本間さんどうか一つ御折り下さい。』

本間が何か考へ込んで居る時に話しかけて満足な返事を得られた例はない。相馬氏のこの懇願に対しても、彼は唯肩を一寸と振って無作法極まる「承知」の合図をした計りだ。それにも拘らず訪問者は言葉忙しく語り出す。興奮したる身振りは物語りに一人の力を添へる。『先づ申上げねばならぬのは、明日は大学の懸賞学術試験の始まる日だといふことです。私も其試験官の一人で受持科目は希臘語で「あります」すが「其」試験方法として「は」、第一に「は」長い希臘文の應用問題を出して之を解釈させ「るのですが、」ます「るのです。問題は勿論印刷することになって居ります。随つてこの問題の紙が前以て受験生の

手に入れば「彼は」勞せずして百点を取ることが出来る「のです」。私共が如何にこの問題の秘密に力を盡してゐるかは申す迄も「ないことです」。一いません

今日の三時頃でした、印刷者はその問題の校正刷りを持って来「たのです」ました。問題といふのはテューンシディーズの著書中の一章の半分計りを抜いたものです。私は其校正刷を今一度綿密に読み返しました。試験問題は一字の間違ひも許すことは出来ません。中々長い文章なので四時半になつてもすっかり校正することは出来ませぬ。大分疲れても来ました、それに友人と茶を飲む約束もありましたので、一時仕事を中止して、問題の紙は机の上に置いた儘室を立出でました(勿論入口の戸に鍵をかけて)再び室に戻つたのはそれから一時間許り後のことです。御承知の通り大学の扉は凡て二重になりて居ります。内側のは緑色の羅紗が張つてあり、外側のは頑丈な柵の板戸です。

私が今帰つて来て、この板戸を開かうとすると、驚いたことには鍵が鍵穴に嵌つた儘になつて居るではありませんか。一時は自分が置忘れて行つたのかと思ひましたが、探つて見れば私の鍵は確かにポケットの底にあるのです。相鍵と申せば召使の弁造が一つ有つて居る計り、而もその弁造といふのは十年来私の室の世話をして呉れた正直者、少しも疑ふ所はありません。尋ねて見れば思つた

通り鍵は弁造ので、當日の通り私に「御茶は如何か」と尋ねる為「御茶を持って来たのですが、「私が」不在であつたので其儘立去る時、ふつと鍵を置き忘れたのだといひます。彼には寧ろ稀しい失策でした。彼が室へ入つたのは、私が出た後五分「間」も過ぎては居なかつたらしい「のです」。鍵を置き忘れた位の事、常の日なれば何の差支もないのですが、今日は日が悪かつた。他人に見られては一大事の試験問題といふものが、偶然其処にあつたのです。

私がどんなに忙いで机に駆け寄つたかマア御推察下さい。駆け寄つた机の上には案の如く私の心配が実現されて居りました。問題の紙は掻き「捜」「一」されて居つたのです。その紙といふのは都合三枚なので、私が室を出る時には一つに重ねて置いたのが、見ればすっかり取り散らされて居るので。一枚は元の机にあります、一枚は床に落ち、一枚は窓の側の机の上に置いてあるではありませんか。』

本間は、始めこそ聞いて居るのやら、居ぬのやら、分らぬ程の不熱心であつたが、話が追々面白くなるにつれて、態度が變つて来た。彼の顔面筋肉は段々緊張の度を増した。独特の好奇心が益々募る。遂に口を開かずには居られなくなる。

『第一頁は床に、第二二頁は窓の側の机に、第三頁は元の場所に、』彼の不可思議なる探偵眼は已に事件の真相を極めたが如く、無雑作に語る

一言が相馬氏の肺腑を突く。『仰有る通りです、寸分違ひません、実に驚いた、どうして夫れを御存じです。』『マア、どうか御話を御続け下さい』本間は何気なく先を促す。『彼「神」の如き彼の頭脳の一端を伺ひ得たる相馬氏は、更らに元氣を「揮」振ひ興して語り續ける。』

『私が第一に弁造の仕業ではないかと疑つたのは勿論ですが、聞いて見ればそうでもない様子、彼は「決して左様なことは御座りません」といひ切る。偽を云ふ様な男ではありません。サア左様なると、もう結論は唯一つです、生徒の中の誰れか、私の室の前を通りか、り不図鍵のあるのに気附く、私が居らぬことを確かめ、室に入って問題を盗み見るといふ順序の外には解釈の仕様がありません。何分此度の試験の懸賞は大大大きいので、うまく行けば莫大の金を得ることが出来るのですから、向見ずの連中が危険を犯しても問題を知らうとするのは、こりやありさうなことです。』

それにしても、これを見た時の弁造の驚きは非常なもので、殆んど氣を失つて了ひ「ました」。片方の椅子「に」倒れました。私は驚いて彼に少量のブランドイを飲ませ其儘其椅子に掛けさせましたが、此場合安閑と看護をして居る訳にも行きませんので、直ちに室内を綿密に検査し始めました。すると直ぐ私の眼に入つたものがあります、窓「の」側の机の上に鉛筆の削り屑が散らばつて居る。もうこれは疑もなく学生の仕業です。

尚よく見ればその削り一層の中に鉛筆の心の折れたのも交つて居る。これから想像すれば、曲者は大忙ぎで問題を寫したに違ありません。所が余り忙いだ為に鉛筆が折れて、■咄嗟の場合に夫れを削らねばならぬ破目になった「の」ものと判断する外はありません。」

本間の注意力は層一層この興味ある事件に集中され来つた。随つて彼の態度は快活になる。

「ヤ、それはいい、ものを見付けました。それは「余程」「非常な」手掛りになります。■併しその机の表面は滑かですか。」

「ハイ、滑かです。夫れ計りでは「な」「あり」ません、アア御聞き下さい。私の書き物をする机はまだ新しいので、表面には赤い皮が張つてありますが「まだ」少しも汚れてゐない。これは弁造も知つて「ゐるのですが」「ゐます、今日迄擦傷一つ附いて「は」居なかつたのです。それがどうでしょう、見れば三寸計り美事に切りさいてあるではありませんか。擦り傷位いではありません、確かに切れて了つて居るのです。それからもう一つ妙なものを見付けました。今申した机の上に粘土らしい小さな黒い塊がある。で何か鋸屑で「も」交つた様な斑点が所々に見えるのです。机の傷といひ、この妙な土塊といひ、皆曲者の残して行つたものに相違はありませんが、さて夫れが何を意味するかは少しも分らぬ。そして此外には何の手掛もない、歩跡等は少しもないのです。殆ど途方に暮れて了ひました。」

がふと心に浮んだのは、幸ひ■貴方が当地に御滞在だといふことです。私は手を打つて私の幸運を喜びました。凡てを其儘に、直ちに此所へ「参つた」伺つたのは申す迄もありません。本間さんどうか御助力が願ひたい。此際取るべき手段は曲者を学生の中から探し出すか、そうでなければ試験を延期して、別の問題を印刷する外はないのですが、そんなこ

とをすれば、どうしてもこの出来事が世間に知れ渡る、暗闇の恥を明るみへさらけ出すといふ結果になつて、畜に一学院のみならず、大学全体の名誉を地に陥す訳です。この事件はどこ迄も秘密の中に片附けて了はねばな「らぬ」りません。マア私の苦しい立場を御推察下さい。」

本間は此時立上つてオーバーコートを着乍ら、

「承知しました。出来る丈の御助力をしませう。これは一寸と面白い事件です。したが、貴方がその校正刷を受取られてから、誰れか、「貴方の部屋へ参つたものはありませんか。」

「あります。羅須といふ印度人の学生が試験に関すること質問に参りました。」

「その印度人は質問の為に来たのですね。」

「さうです。」

「で、その時、例の校正刷は矢張り貴方の机の上にあつたのですか。」

「ハア。併し確かその時に「は」巻いてありました。」

「でも、夫れが問題の紙だと「いふことは」分る」と思ひますか」「ことはありませんか。」

「或は分つたかも知れません。」

「その外には誰れも来なかつたのですね。」

「ハイ。」

「それから其外に、その校正刷があるといふことを知つて居る人は……」

「印刷者の外には誰れもありません。」

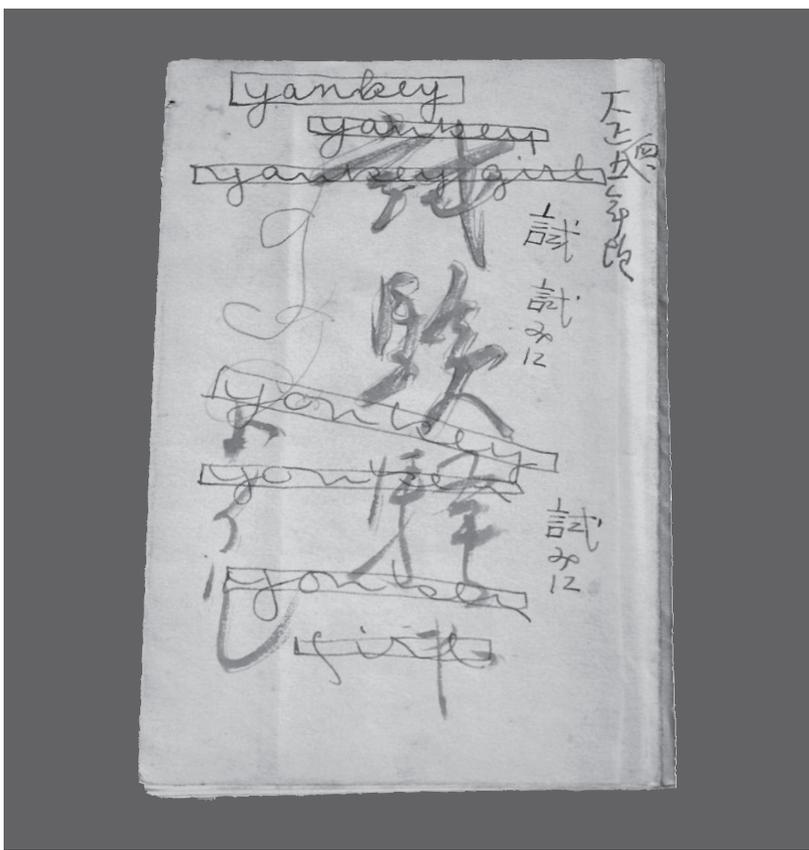
「弁造といふ召使はどうです。」

「イヤ、彼は決して知りません。其外一人も知つたものは居ないと思ひます。」

「その弁造は今何所に居るのです。」

「彼は可愛相に今も申した通り、ひどく精神を取乱して、私の室の椅子に凭れた儘です。私は彼を其儘にして大忙ぎで此所へ参つた訳です。」

「そして、貴方は室の戸を開いた儘で御出でになつたのですか。」



「イヤ、その点は御安心下さい。問題の紙は別に確かな場所へ仕舞って来ましたから」

「ではつまり、結論はこうですね。若し印度の二学生が、試験問題の紙だといふ事を知らぬとすれば、誰か、室へ入って、偶然其所にあった問題を見付け、夫れを盗み見たといふことになるのですな」

「その外に想像の仕様がありません」
本間は此時謎の如く薄気味の悪い微笑を浮べた。そして、
「サア、それでは現場を検べに参りませう。」

僕の方を振り向いて、
「綿園君、この事件は、君に適しない。肉体的ではない精神的の事だからね(僕の本職は医者であるので)併し、君が欲するならば一緒に来給へ。」

「相馬さん、では御案内下さう。」

資料紹介

『試験騒ぎ』

落合 教幸

明治四十五年に早稲田大学予科に編入した平井太郎は、翌大正二年に経済学科に進学する。大正五年に卒業の後はいざまな職を経験し、大正十二年には江戸川乱歩として「二銭銅貨」を発表し、探偵小説作家として歩んでいくことになる。

大正時代の中頃は、明治期の黒岩涙香

などの翻案探偵小説の流行も下火になっていて、探偵小説を掲載する「新青年」などの雑誌が数多く出現する時代の、少し前の段階に当たる。この時期には、コナン・ドイルやエドガー・アラン・ポーの作品は高等学校や大学の英語教材として使用されることもあり、翻訳だけでなく原書でも読まれていた。

自伝的著作である「探偵小説四十年」などの記述にあるように、大学時代の乱歩は、西洋の探偵小説を耽読した。乱歩が利用していたのは、通っていた早稲田大学の図書館のほか、都内のいくつもの図書館だった。上野図書館・日比谷図書館では洋書を、大橋図書館では翻訳を読んでいたようである。

大学時代の探偵小説研究の成果は、手製の本「奇譚(EXTRAORDINARY)」としてまとめられる。この「奇譚」は、当時乱歩が読んだ探偵小説を解説したもので、のち大正八年に団子坂で古本屋を開いていた時代には、その棚に置かれたのだが、買い手がつかなかったとされるものである。この本は、押川春浪や黒岩涙香などの日本の作家にはじまって、ポーやドイルについての記述に多くのページが使われ、ヴェルヌやウェルズといったSF作家も紹介される、二百ページを超える著作である。「奇譚」は全体で十六章から成るが、そのうち第十一章と第十二章がドイルにあてられていて、分量だけから考えてもこれはポーに次いで重要な扱いでと言えらる。

その頃の乱歩は、探偵小説を研究すると同時に、翻訳も試みていた。現在残されているのはこの「試験騒ぎ」のほか、コナン・ドイルの「グロリア・スコット」「舞踏人形」、アンドレーエフ「我狂せりや」「タイトルはいずれも乱歩が記したまま」がある。しかしこれらの翻訳はノートに記してあるだけで、清書し製本までされているものは「試験騒ぎ」のみとなっている。こういった翻訳の資料も、以前紹介した「二銭銅貨」「D坂の殺人事件」「人間椅子」などの草稿とともに、「EXTRAORDINARY」と題された大型の封筒で保存されていた。

この「試験騒ぎ」は、保存用封筒の書き込みから、乱歩が大正四・五年頃に翻訳をおこなったものだと考えられる。冒頭には「コナン・ドイル作ささふね訳」と記してある。「ささふね」は、乱歩が以前から投書や同人誌などで使用していた筆名である。ドイルの「Adventure of the Three Students」(三人の学生)の全訳で、本文は六十七ページである。

ドイルの「三人の学生」は、大学の奨学金試験における不正をめぐる事件である。大学町に滞在していたホームズとワトソンは、講師のソームズから相談を受ける。奨学金試験の問題を作成していたソームズの部屋に、何者かの侵入した痕跡があったという。彼の家には下宿している学生が三人いて、全員が試験を受けることになっていた。この三人の学生の中から、試験問題を盗み

見た者を探してほしいというのが依頼である。下宿を訪れたホームズは部屋を調査し、使用人や学生に話を聞いた後、その犯人を割り出す。

乱歩の「試験騒ぎ」は、「三人の学生」の翻訳ではあるのだが、ホームズの名は「本間砂六」となっており、またワトソンは「綿園」というように日本名が与えられている。舞台となっているのは英国で、学校は「セントリユーク学院」とそのままだが、依頼者の教師ヒルトン・ソームズは「相馬春人」である。インド人留学生ラースには「羅須」と漢字が与えられ、使用人のバニスターは「弁造」となっている。その他いくつかの点で改変がされているが、文自体にはさほど大きな変更はないようだ。

そして冒頭約三ページには、原文にはない説明的な文章が付け加えられている。ここでホームズならぬ「本間砂六」の人物と推理法が説明される。今回はその冒頭部分から、本間が捜査を引き受け現場へと向かう、十七ページまでを掲載した。

このような乱歩の翻訳は、のちに乱歩自身も書いてるように、覚え書き的な側面が強く、発表の意志は、皆無とまでは言えないにしてもそれほど強くはなかったようだ。むしろ翻訳するということを通して、探偵小説の構成や文体を学んでいったという意義が大きく、それがのちの乱歩自身の作品へとつながっていくことになる。



編集後記

▼「センター通信」第四号をお届けします。当センターではこの「センター通信」のほかに紀要「大衆文化」を刊行しています。二〇〇八年度には創刊準備号を刊行し、二〇〇九年度には創刊号と第二号を刊行しました。第二号では「D坂の殺人事件」の草稿を紹介しましたが、二〇一〇年四月刊行の第三号では「人間椅子」の草稿が掲載されます。

▼二〇〇九年度も乱歩関連のさまざまなイベントが催されました。

▼八月には結城座の公演「乱歩・白昼夢」がありました。江戸糸あやつり人形による、乱歩の四つの短篇「芋虫」「屋根裏の散歩者」「一人二役」「人でなしの恋」の舞台です。「大衆文化」第三号に後藤隆基氏のレビューが掲載されます。

▼十月には国立劇場で乱歩歌舞伎「京乱歩鉤爪(きょうようをみだすうわざのかぎづめ)―人間豹の最期―」が上演されました。二〇〇八年の「江戸宵闇妖鉤爪(えどのやみあやしのかぎづめ)―明智小五郎と人間豹―」の続編です。

▼十月十日には、読売新聞主催「ミステリー小説講座―読売江戸川乱歩フォーラム二〇〇九―」が立教大学を

会場として開かれました。今回は、綾辻行人・喜国雅彦・北村薫の三氏によるトークショーでした。

▼神奈川近代文学館では十月三日から十一月十五日まで「大乱歩展」が開催されました。この催しについては今号に鎌田氏にご寄稿いただきました。

▼旧江戸川乱歩邸は毎週金曜に一般公開しています。今年度も数百人の見学者が訪れました。中庭から応接間を見学できます。今年度から、ガラスケースを設置して愛用品や書籍の展示もできるようになり、少しずつですが充実したものになっていくと思います。(落合)

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信 第四号
二〇一〇年三月三十一日 発行
編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

〒二七・八五〇一
東京都豊島区西池袋三―三四―一
電話番号 〇三―三九八五―四六四一
(FAX兼)

E-mail: rampo@gp.rikyo.ne.jp

開室日

月・水・金曜(公開は金曜のみ)

(十時三十分～十二時、

十三時～十六時)

資料閲覧には事前予約が必要です。